

■シリーズ 沼津兵学校とその人材 117

沼津兵学校旧蔵の『官板実測日本地図』

■江原素六とその周辺 76

旧幕臣坂部正修が配布した東照神君御遺語

■館外展示のお知らせ



『官板実測日本地図 山陰山陽南海西海』の全体
当館蔵
(195.4cm×142.1cm)

二〇二六年七月

通巻
166号

沼津市明治史料館通信



『官板実測日本地図 山陰山陽南海西海』に押された「沼津学校」蔵書印



『官板実測日本地図 北蝦夷』に
押された「開成所刊行」印

シリーズ 沼津兵学校とその人材

117

沼津兵学校旧蔵の『官板実測日本地図』

近年、当館が古書店から入手した資料に『官板実測日本地図』全四舗（北蝦夷・蝦夷諸島・畿内東海東北陸・山陰山陽南海西海）がある。うち、畿内東海東北陸を除く三舗には「沼津学校」の蔵書印が押されており、沼津兵学校の蔵書だったことがわかる。『官板実測日本地図』は、伊能忠敬が測量・作成した地図を幕府が初めて印刷したものである。大きな図なので折りたたむようになっ

ていて、絹製の薄茶色の台紙には題箋が貼られている。木版による地図には淡彩色がどこされている。北を上にとすると、三舗とも「沼津学校」の朱印は左下角に押されているほか、北蝦夷は右上角、蝦夷諸島・畿内東海東北陸・山陰山陽南海西海は左上角に「開成所刊行」の小型朱印（二・一×〇・六cm）が押されている。

一八六七年開催のパリ万国博覧会にも出品されたように、外交上の必要性もあり文久元年（一八六一）に老中から作製が下命された『官板実測日本地図』であるが（杉本史子『近世政治空間論』、二〇一八年、東京大学出版会）、慶応四年閏四月の再版や明治三年（一八七〇）に明治政府の大学南校が刊行した版なども存在する。台紙・題箋の色や開成所の小型朱印の存在から、当館蔵の地図は、慶応元年（一八六五）頃に開成所によって刊行された初版であることが裏付けられる（高木崇世之『官板実測日本地図』論考（二）『伊能忠敬研究』第二八号、二〇〇二年、伊能忠敬研究会）。「開成所刊行」小型朱印は、『官版仏郎西単語篇』（一八六二年）、『英吉利文典』（三版、一八六四年）といった書籍にも押されており、いずれも慶応元年（一八六五）以前に刊行されたものに限られる

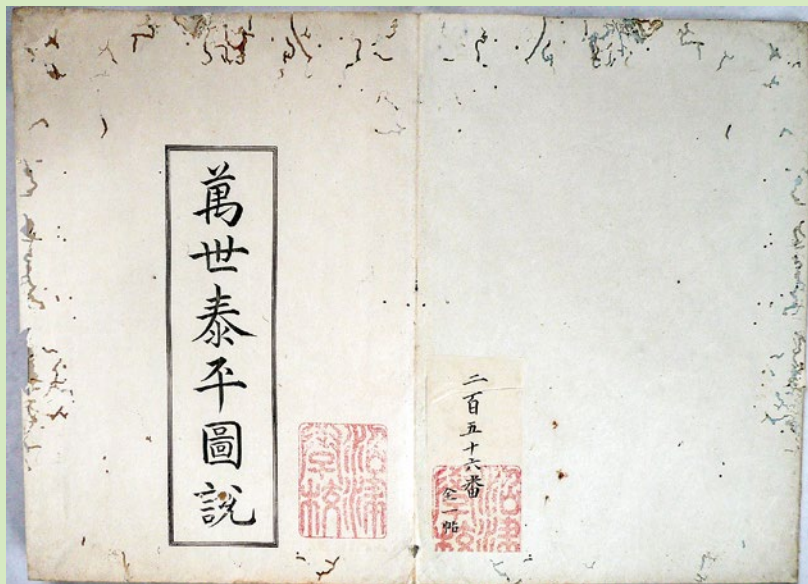
とされる（櫻井豪人「開成所刊行」の朱印と開成所刊行物」『汲古』第三五号、一九九九年、汲古書院）。

沼津文庫（当館蔵）や葵文庫（静岡県立中央図書館蔵）に残された書籍からは、「沼津学校」蔵書印には、小型（三・九×二・〇cm）のものと大型（六・五×四・九cm）のもの二種が知られるが、当該の『官板実測日本地図』に押されているのは小型のほうである。残念ながら、その前後関係や使い分けについては不明である。

大型の「沼津学校」蔵書印が押された書籍については、最近発見された例を写真で紹介しておく。伊豆市牧之郷（かつての静岡県田方郡北狩野村）の旧家の蔵書に含まれていたものである。当館では入手できなかったが、ここ一〇年以内にも、「沼津学校」小型朱印が押された『改正増補英和对訳袖珍辞書』（一八六六年、開成所刊）が古書店で売り出されたこともあった。散逸し、思わぬところから発見された沼津兵学校旧蔵書の例は、「新発見の沼津兵学校旧蔵書」（『沼津市明治史料館通信』第一〇号）や「小林家書籍目録」（『沼津市明治史料館史料目録38』）などでも紹介したことがある。

ところで、江原素六の証言によれば、伊能図の原図の一部が旧幕府から移管され、沼津兵学校に所蔵されていたという（拙稿「沼津兵学校にあった伊能図」『静岡県近代史研究会会報』第三一二号、拙著『旧幕臣の明治維新沼津兵学校とその群像』。もちろん、それと『官板実測日本地図』とは直接関係ない。

（樋口雄彦）



「沼津学校」蔵書印が押された『本朝往古沿革図説』

伊豆市牧之郷飯田家資料

当館所蔵・江原素六関係文書の中に、明治三四年（一九〇一）五月五日付で坂部正修という人物によって作製された「東照神君御遺語 犬々三年一人代人々三年犬一代」という一枚の印刷物がある。折りたたまれ、裏側（差出人）に「麻布龍土町五十七 江原素六」と墨書された封筒に入っていた。

坂部正修は、明治期に開拓使十二等出仕・陸軍会計軍吏補・陸軍一等軍吏などを歴任した旧幕臣・静岡県士族である。明治三十六年（一九〇三）四月一日に亡くなっている、その二年前に東照神君、すなわち徳川家康の「ありがたい言葉」を印刷し、知人らに配布したものだと思われる。江原はそれを誰かに転送しようとしたのだろうか。

坂部は明治一二年（一八七九）時点で四三歳だった、で、江原素六より五歳ほど年上だった。旧交会・同方会・葵会といった旧幕臣の親睦団体の会員名簿には名前がないし、江原とどのような知り合いだったかはわからない。ただ、明治二八年（一八九五）一〇月に東京・徳川家達邸で開催された旧幕臣出身陸海軍将校凱旋歓迎会には来賓として名を連ねたほか（『歓迎会報告書』、三〇年（一八九七）の鳥羽・伏見戦死者碑建立に対しては寄付金を出している（『戊辰東軍戦死者碑建設了報告』）。また、新聞に掲載された死亡広告（『読売新聞』明治三十六年四月二〇日付）には、親戚として小山教能（弥吉、陸軍一等軍吏、明治三十九年没・五九歳）の名前がある。小山は旧幕時代には撒兵差図役頭取、静岡藩では沼津兵学校

修行兵の隊長だったので（前田匡一郎『駿遠へ移住した徳川家臣団』第三巻）、その関係で江原とも交遊関係があったのかもしれない。本人から贈られたのであろう、江原家資料には坂部のポートレートも残されていた。

さて、「東照神君御遺語」のことである。印刷された文章からは、「平東雄」、すなわち勤王の志士・国学者佐久良東雄（一八一―一六〇）が、「本居大人随筆」、つまり本居宣長の随筆『玉勝間』に紹介された徳川家康の逸話に感激し、その内容を人々に広めるべく執筆した解説文を、以前に入手していた坂部が、それを人生の支えにしていたこともあり、耳順（六〇歳）の記念として、さらに世間に宣伝したいと考え、印刷・配布したものであることがわかる。いわば二重の利用ということになる。なお、桜田門外の変に連座し幕府に怨みを抱いて獄死した佐久良が、徳川家康の言葉を奉戴したというのには少し疑問があるが、その点について真偽のほどは不明としておく。



坂部正修

当館蔵

62歳の明治34年（1901）撮影。江原素六旧蔵で、「東照神君御遺語」とともに送付されてきたものかもしれない。

典拠となった本居宣長の著書（岩波文庫版『玉勝間』下）には、「板坂卜齋物語」からの引用として、要約すれば以下のように記されている。「大御所様」こと徳川家康は、昔からの教訓として、「小身の侍共」に常々おっしゃっておられた。他人から「犬だと」と蔑まれても、三年間は我慢して慎ましく生活すれば、奉公も「人倫のまじはり」も十分にできる。一方、他人から「きれいな人」だとおだてられ、「酒宴」や「振舞」に浪費ばかりしていれば、やがて人馬も養えなくなり、いざという時、出陣すらできなくなってしまう、一生の間、「犬畜生」と卑しめられてしまう。

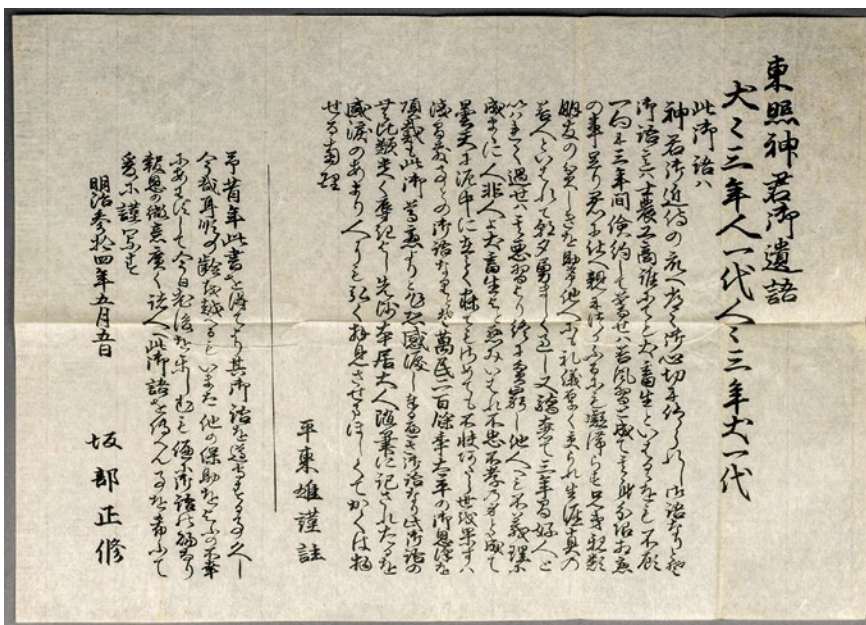
そもその典拠が「板坂卜齋物語」だとすれば、坂部作製の印刷物は、二重どころか三重の引用ということになる。板坂卜齋（二世）は、家康・秀忠に仕えた医師である。

この「東照神君御遺語」は、江原素六の座右の銘でもあった「先憂後楽」の精神にも通じる。江原もこれを読んで、家康の言葉に敬服したに違いない。

以下は余談である。坂部正修の祖父かと思われる、坂部兵助（正信、天保一二年没、菩提寺である東京都新宿区・法善寺の墓誌より）は、幕府の徒目付をつとめていた文政一二年（一八二九）、同僚の小川伊兵衛とともに、殺人を犯した息子の責任を問われ近江国・大溝藩預けとなっていた蝦夷地探検家近藤重蔵が病死した際、その検使役をつとめている（『近藤正斎全集』第一巻）。また、小川伊兵衛の子小川辰太郎（達太郎、明治三年一月一三

日没・四二歳、沼津市・大中寺に墓石あり）は、維新後は静岡藩の沼津添奉行になった人であるが、幕末には徒目付・長崎奉行支配吟味役・信州中野代官などを経て、房総の幕府領を担当する代官をつとめており、その際に近藤重蔵の四男守信（熊蔵・重三郎）を手代として採用している（谷本晃久『近藤重蔵と近藤富蔵』、二〇一四年、山川出版社）。亡父と重蔵の間に前述のような関係があったことから、改易された近藤家の再興に力を貸したのであるのか、それとも単なる偶然なのか。

（樋口雄彦）



「東照神君御遺語 犬々三年人一代人々三年犬一代」

当館蔵

翻刻（読点は適宜付した）

東照神君御遺語

大々三年人一代人々三年犬一代

此御語ハ

神君御近侍の衆へ常々御心切に仰られし御語なりとぞ、御語意ハ士農工商誰にても犬畜生といはるゝをも不顧、一向に三年間儉約して暮せハ善風習と成て、其身分限相應の事足り、君に仕へ親に仕かふるにも凝滞らず、兄弟親類朋友の貧しきを助け他人にも礼儀厚く交られ、生涯真乃善人といはれて朝夕勇ましく過し、又驕奢て三年間好人といハれて過せハ其悪習より終に貧窮し他人へも不義理に成まゝに人非人よ犬畜生よと惡みいハれ不忠不孝乃身と成て、曇天に泥中に在て寝てもさめても不快あたら世を果すハ浅間敷事との御語なりとぞ、万民二百余季大平の御恩沢を頂戴も、此御尊慮よりと乍恐感涙し奉るへき御語なり、此御語の無比類貴く辱きよし先師本居大人隨筆に記されたるを感涙のあまり人にも弘く拝見させまほしくて、かくは物せるなり

平東雄謹註

予昔年此書を得てより其御語を遵守する事久し、今哉耳順の齢を越へるもまた他の保助をよふの不幸にあわずして今日老後を楽しむも偏に御語の賜なり、報恩の微意広く諸人へ此御語を伝へん事を希ふて爰に謹写す

明治参拾四年五月五日

坂部正修

館外展示のお知らせ

第23回明治史料館 館蔵資料展「写真でみる戦後復興期の沼津」

日時 9月2日(水)～9月29日(火)

内容 今回の館外展示は、「昭和100年」記念の一環として、戦後復興期の沼津を写真で振り返ります。写真を通して、当時の人々の思いや、沼津のたくましい息吹を感じていただければと思います。

場所 沼津信用金庫本店ストリートギャラリー 沼津市大手町5丁目6-16

沼津市明治史料館通信

第166号

令和8年7月31日

編集・発行 沼津市明治史料館

〒410-0051 沼津市西熊堂372-1

TEL 055-923-3335

FAX 055-925-3018

印刷 みどり美術印刷株式会社



▲大手町付近(昭和21年)



▲都市計画が進む沼津駅前(昭和30年頃)